

今週の為替相場見通し(2020年11月30日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		103.69 ~ 104.76	104.15	103.50 ~ 105.50
ユーロ	(ドル)		1.1800 ~ 1.1964	1.1964	1.1850 ~ 1.2050
(1ユーロ=)	(円)		123.15 ~ 124.55	124.50	123.50 ~ 125.50
英ポンド	(ドル)		1.3265 ~ 1.3399	1.3318	1.3200 ~ 1.3500
(1英ポンド=)	(円)	*	137.87 ~ 139.86	138.54	137.00 ~ 140.00
豪ドル	(ドル)		0.7266 ~ 0.7399	0.7384	0.7250 ~ 0.7470
(1豪ドル=)	(円)	*	75.73 ~ 77.05	76.89	76.00 ~ 77.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 天雲 遊也

(1) 今週の予想レンジ: 103.50 ~ 105.50 円

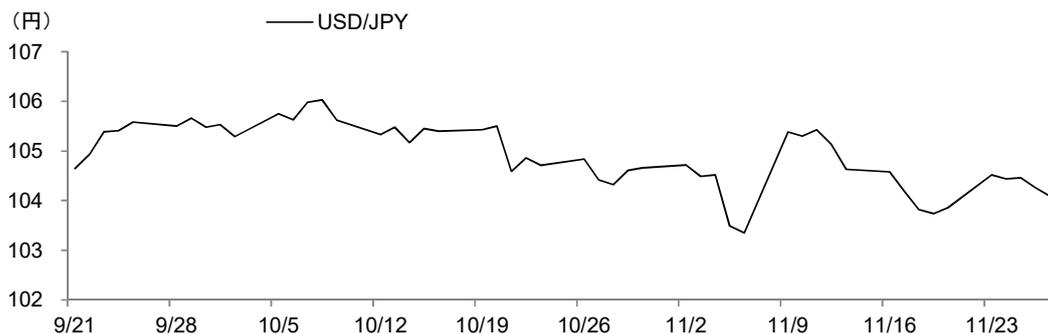
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は動意に乏しい展開となった。週初23日に103.83円でオープンしたドル/円は、東京市場休場に伴う薄商いの中で週安値である103.69円を付けたが、米11月PMIが製造業並びにサービス業において予想を上回る結果をきっかけに104円台後半の急伸。その後、バイデン氏の閣僚人事の発表を受けて104円台半ばまで反落。翌24日は、投機筋による売りフローを主導に104円台前半まで下落したが、トランプ大統領がバイデン氏への政権移行手続きを容認したこと、米9月ケースシラー住宅価格指数が予想を大きく上回ったことから週高値となる104.76円まで上昇。しかし、米ダウ平均の好調を横目にドル売りが進み、再び104円台半ばまで下落。25日は米感謝祭を控え動意に乏しい値動きとなり104円台半ば付近でのレンジ推移となった。26日、東京時間は本邦企業を中心としたドル売りにじり安となり104.26円まで下落。海外時間に入ると、米国休日の影響から積極的な取引が控えられ、104円台前半での動意薄の推移となった。27日は、月末を控えた売りフローや米長期金利が低下する動きにドル円は上値の重い推移となり、104円台割れ。しかし、米感謝祭と週末の谷間で、積極的な商いは控えられ、その後は104円付近での推移が続き、結局104円前半で越週している。

今週のドル/円相場は動意の乏しい展開が継続すると予想。先週は、新型コロナウイルスのワクチン開発に関する明るいニュースや、堅調な株式市場の動きも見られたが、足許の感染拡大が広がる新型コロナウイルスの状況が報じられる中で楽観一色とはならず、ドル/円は動意に乏しい推移が続いた。今週も新型コロナウイルスに関する報道に一喜一憂する展開が想定されるが、年末を控えて新規材料に乏しい中、狭いレンジでの推移となろう。重要指標の発表は、1日(火)に米11月製造業PMI、11月ISM製造業景況指数、3日(水)に米新規失業保険申請件数、4日(金)に米11月雇用統計の発表が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(11/23~11/27)の値動き: 安値 103.69 円 高値 104.76 円 終値 104.15 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 1.1850 ~ 1.2050 123.50 ~ 125.50 円

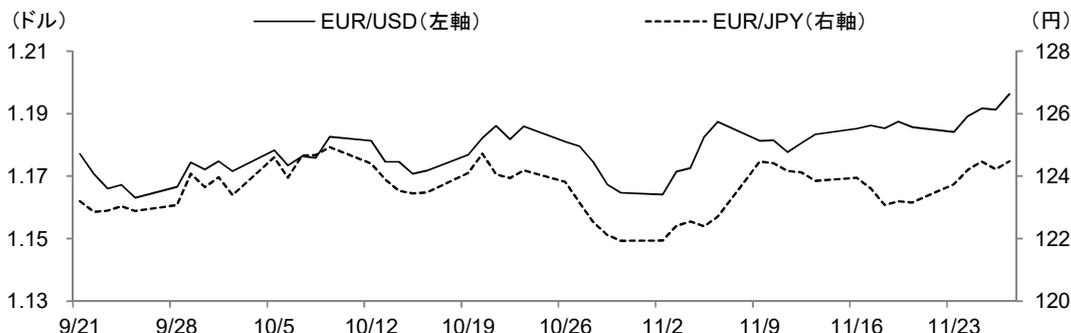
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は上昇する展開。週初23日に1.18台後半でオープンしたユーロ/ドルは英製薬会社のワクチンの有効率が約90%と伝わるとリスク志向のドル売りが強まり1.19台に乗せるも、米11月マークイット製造業、サービス業PMIの良好な結果を受けたドル買い戻しに反落し、ストップロス巻き込みながら急落、一時週安値の1.1800まで下落した。翌24日は独7~9月期GDP確報値や独11月IFO現況指数が予想を上回ったことで、ユーロ/ドルは1.18台後半まで上昇したものの、米住宅関連指標を受けたドル買いに1.18台前半まで反落した。しかしその後は、リスク志向のドル売りが再び優勢となり、ユーロ/ドルは1.18台後半まで値を戻した。25日は、1.19台前半まで上昇するも、翌日に米感謝祭を控える中その後は1.19台前半で小動きとなった。26日はFOMC議事要旨にて12月FOMCで量的緩和強化への期待が高まったことを受けてドル売りユーロ買いが進んだ。27日は前日からの流れを引き継ぎドル売りが優勢となり、一時週高値である1.1964まで上昇し越週した。対円では、週初23日に123.20円台でオープンしたユーロ/円は米11月マークイット製造業、サービス業PMIの良好な結果を受けドル/円が上昇する流れに、ユーロ/円も123.80円台まで上昇。翌24日は新型コロナウイルスに対するワクチン期待やトランプ米大統領がバイデン氏への政権移行手続きを容認したこと等によるリスク志向に円売りが強まり、ユーロ/円は続伸。またダウが初の30,000ドル台へ乗せる動きからドル売りも強まったことからユーロ/円は124.30円台まで上昇した。25日は翌日に米感謝祭を控える中124円台前半で小動きとなった。26日はFOMC議事要旨を受けたドル売りユーロ買いから一時週高値である124.55円まで上昇した。27日は引き続きドル売りが優勢となる中ユーロ/ドルは124.50台で越週した。

今週のユーロ/ドルは上値重い展開を予想する。先週は新型コロナウイルスへのワクチン期待等からドル売りが先行し、ユーロ/ドルは約9月ぶりの高値をつけている。また、欧州圏における新型コロナウイルスの感染拡大の増加ペースについては一旦ピークを打ったように見え、フランス政府においては11月28日からの小売店の営業再開を許可しており、ユーロ相場には追い風となる。ただ12月のECB政策理事会での追加緩和観測が高まる中、ユーロを買い進めるような展開にはなりづらく、上値余地は限定的であると考え。前回の高値である1.12は節目として意識されやすく、その付近では上値重くなると考える。また、ブレグジット交渉については本稿執筆時点ではまだ合意に至っていない。交渉は今後も続く予定とのことだが、クリスマス休暇等勘案すると時間的猶予はあまり無く、もし現状の合意期待に水を差すようなことがあればユーロは下落しよう。重要指標としては、12月1日(火)にユーロ圏11月CPI、2日(水)にユーロ圏11月失業率、3日(木)にユーロ圏10月小売売上高の発表を予定している。

(3) 先週までの相場の推移

先週(11/23~11/27)の値動き: (対ドル) 安値 1.1800 高値 1.1964 終値 1.1964
(対円) 安値 123.15 高値 124.55 終値 124.50



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.3200 ~ 1.3500 137.00 ~ 140.00 円

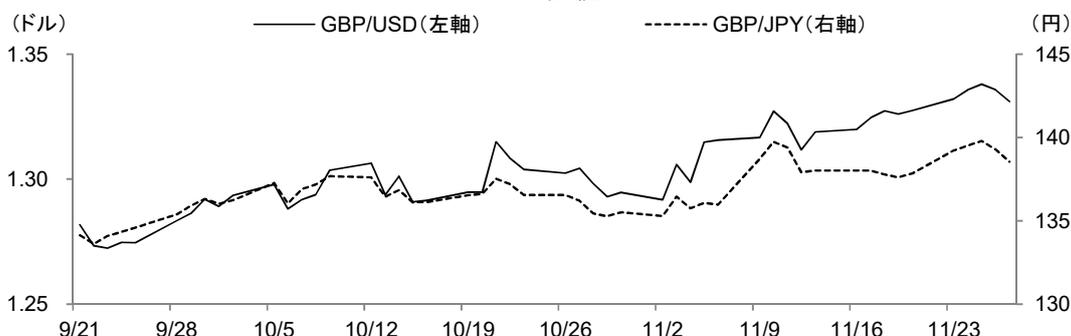
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、方向感の交錯した横這い。対ドルでは細かい上下動を繰り返した挙句、週を振り返れば横這い。対円では上昇が先行したものの反落して、結局、小幅上昇。対ユーロでは軟調気味の横這いを支配的とし、週引けに掛けて一段水準を切り下げた。週明け23日は、英製薬会社と英大学が開発中の新型コロナウイルス感染症ワクチンの治験結果が高い有効性を示したとの報で始まった。ポンドにとっても好材料であり、堅調な滑り出しを見せたものの、米時間に入り、11月の米各種PMIが上振れを示すとドルが全面急騰、ポンドも対ドルで急反落した。その後、ドルは週引けまで全面的な軟調推移に終始したが、ポンドに対しては細かい上下動を繰り返した。何かしらポンド側の要因の存在が考えられたものの、明確なものは見定められなかった。英とEUの間の将来関係交渉は、引き続き悲観的な報と楽観的な報とが交錯し、その成否ははっきりとしないままだった。スナク財務相は25日発表した歳出計画で、GDP比19%と平時では史上最悪の財政赤字予想や▲11.3%という約300年ぶりの大幅な経済縮小予想などを発表した。数字は衝撃的ではあったものの、現状に鑑みれば予見できた内容で、ポンドへの影響はやはり不透明だった。週後半に掛けてのポンド全面軟調の背景には、23日に有効と報じられた上述ワクチンの有効性に、25日以降、疑義が投げ掛けられたことも貢献したものと考えられた。週引け27日の主要通貨の値動きは、ユーロ全面高と言えるものだったが、残念ながら、その要因についても明確なものは見当たらなかった。

今週の英ポンド相場は、荒っぽい値動きを警戒。上昇か、下落かは、注目イベントの経過次第で、現時点で予想を立てるのは難しい。米感謝祭休日を経て、米機関投資家の大幅な動意低下が見込まれ、流動性低下が見込まれることも、通常以上に値動きを増幅する要因になりかねない。2017年3月の離脱交渉開始以来、昨年10月の離脱条件合意後は将来関係交渉において、英側とEU側の交渉担当者は、「合意は可能」と「問題点は残存」という交錯する情報発信を一貫して繰り返してきた。同時にこれまで、ありとあらゆる「期限」が蔑にされてきた。こと英のEU離脱に関しては、確かなことは何ひとつ確かでないことだけと言っても過言ではない。しかし、時間の経過と共に、問題点を解消できないまま交渉成立に望みをつなぐ余地はいよいよ狭まってきており、今週が最後の山場になる可能性は考えられる。或いは、なんらかの形で交渉がこのまま継続されるとしても、市場参加者の大半が、「合意は12月10~11日のEU理事会(サミット)には間に合わない」と判断すれば、ポンドは大きく水準を切り下げるリスクがある。或いは、逆に、同理事会に諮るなんらかの合意(のようなもの)が成立すれば、少なくとも一旦、ポンドが大きく買い上げられる展開も考えられる。英とEUの将来関係交渉ほど逼迫した案件ではないものの、同理事会では、もうひとつ、EUの資金配分に関する「法の支配の紐付け」も重要な議題に上ろう。同条件の標的とされるハンガリーとポーランドが、既にEU中期予算(2021~27年)とEU次世代基金(コロナ復興基金)に拒否権を行使する姿勢を明確にしており、その成立が遅れる可能性が懸念される。とりわけ、次世代基金は、EU全体の景気回復の鍵を握る重要案件で、その成立/資金配分の遅延は、ユーロ圏だけでなく、EU全加盟国の経済・通貨にとって悪材料と読まれよう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(11/23~11/27)の値動き: (対ドル) 安値 1.3265 高値 1.3399 終値 1.3318
(対円) 安値 137.87 高値 139.86 終値 138.54



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.7250 ~ 0.7470 76.00 ~ 77.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは0.72台後半から0.73台後半まで上昇した。週初、NZ3Q小売上高が28.0%（市場予想19.0%）と前回値▲14.6%からの力強い回復を見せるとNZDは0.6931まで上昇。豪ドルは連れ高となった。加えて英製薬会社のワクチンの有効性が高い確率を示したとの報道に0.73台半ばまで上昇。その後堅調な米Markit PMIを背景に大きくドルが買われ、0.7265近辺まで下落した。また、一層のドル安圧力がかかる可能性が懸念されていた次期米財務長官人事に関してドル高牽制者のブレynaード氏が最終候補者リストから外れ、イエレン前FRB議長が指名される予定と複数の関係者が明らかにした事でも一部ドルが支えられた。24日、米連邦財産の管理維持を行う政府独立機関、GSAが大統領選の勝者をバイデン氏と認定し、政権移行を開始可能と書簡で通達した。大統領選の混乱で大きく後倒しされるとみられていた経済回復支援政策等の立案が今後再始動するとの観測でリスク許容度が改善。豪ドルは0.73台へ再度載せ。その後NZ政府がRBNZのマンデートに住宅価格の安定を追加する提案をしているとの報道でNZD/USDは0.6930から0.6985近辺まで急騰。AUD/NZDは1.0530近辺から1.0470近辺へ下落した。NY時間でダウが3万ドルを突破し原油価格も上昇。リスクオンの基調が強まる中、0.7320から0.7370近辺まで上昇した。26日米国休場の中、市場参加者少なめ。月末絡みの調整が行き交う中ナローレンジで推移。米国が感謝祭休場明けに米株先物がやや上昇すると豪ドルも連れ高となり、0.74をトライも0.7399までとなった。

今週は先週失敗した0.74台を再度トライする展開に期待したい。調整を挟みつつも株高、ドル売りの流れが続くとみる。主な経済指標予定は1日（火）中国11月製造業PMI、RBA理事会、豪7-9月期経常収支、2日（水）、豪7-9月期GDP、ロウRBA総裁議会証言、3日（木）豪10月貿易収支、4日（金）、豪10月小売売上、米11月雇用統計等の発表が予定されている。RBA政策金融決定会合においては金利据え置きで踏み込んだ追加緩和の示唆は特段ないとみる。故に豪ドルは売られにくいと予想する。但し、現在豪連邦政府は中国の関税制裁に対してWTOへ訴える方針を固めており、ヘッドラインリスクには十分注意を払いたい。この他、米製薬会社のコロナワクチン接種が早ければ英国で12月7日から開始される可能性がある。英製薬会社の有効性証明の為の追加試験に関しても注目が集まる。更なるリスクオンフローに期待したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(11/23~11/27)の値動き: (対ドル) 安値 0.7266 高値 0.7399 終値 0.7384
(対円) 安値 75.73 高値 77.05 終値 76.89



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。